

上杉鷹山公

封建時代第一の名君を生んだ土壤は深く広かつた（上）

中野 英樹

一、はじめに

山形県立米沢興譲館高校（以下、興譲館高校）の東京支部総会は毎年ホテルニューオータニで開催される。私の出身高校である宮崎県立高鍋高校（以下、高鍋高校）は高鍋町と米沢市が姉妹都市の関係にあることから親しく交流させて頂いていて、高鍋の在京同窓会とは半一年の総会に代表者を招待し合っている。しかし、私はこの会の会長になって六年を過ぎたのに何時も都合が悪く出席出来ないでいた。念願が叶い昨年初めて副会長の腰高さんと共に参加出来た。神野支部長と宮坂幹事長がにこやかに出迎えてくれた。総会には本部の同窓会会长や米沢市長を始めそうそうたる来賓や



上杉鷹山公像

藩校だと大いに感激し惚れこんでしまった。因みに興譲館高校からは過去、東京

府知事、日銀總裁（二人）、児童文学の浜田廣介、哲学者で文化功労章の高橋里美、文芸春秋社社長等綺羅星の如き人材を輩出している。文化勳章受章者も二人出ている（伊東忠太・建築家、東京帝大名誉教授、実績は平安神宮、靖国神社神門、同鳥居、築地本願寺、湯島聖堂、上杉神社等多数——一九四三年受章、我妻栄・東大名誉教授、我国民法学の骨格を作った『近代法における債権の優越的地位』は民法史上不朽の名論文と。一九六四年受章、米沢市に我妻栄記念館がある）。九州の小都市高鍋町に在る高鍋高校はどうしてこのような名門校と交流があるのか、江戸時代の米沢藩主だった上杉鷹山公は高鍋藩の出身だが、実はこの名君中の名君を生むに至ったルーツであるこの小藩については知る人が少ない。江戸時代から現在までに鷹山公について書かれている成書は数多く、関連資料も多数残されていて、如何に多くの人がこの名君に学ぼうとして来たかを偲ばせる。しかし、これらの成書の殆どが鷹山の出身については九州高鍋三万石の小藩としか触れていない。内村鑑三（一八六一—一九三〇）は明治四一（一九〇八）年に『代表的日本人』を著わしたがこれは同年の英文著作『Representative Men of Japan』の邦訳本（後にドイツ語やデンマーク語にも翻訳された）だ。この中で内村は、

新日本の創設者・西郷隆盛、封建領主・上杉鷹山、農民聖者・二宮尊徳、村の先生・中江藤樹、仏僧・日蓮の五人を眞の日本人の代表に挙げ、西欧社会に日本をアピールしている。日本人の人たち、なかでも米沢の人達が今に至るも畏敬し、敬慕してやまない鷹山公の人間像を、その故郷・高鍋藩という背景を加えて浮き彫りにしたく少し調べてみた。

二、上杉鷹山襲封までの米沢藩の経緯

(一) 米沢藩の起源と凋落

米沢藩の始祖は、室町時代の末期、麻の如く乱れた関東平野に雄飛した戦国時代の英傑・上杉謙信（輝虎、享禄三（一五三〇）年）天正六（一五七八）年だ。かの名将・太田道灌（永享四（一四三二）年～文明十八（一四八六）年）から百年後に生きた人である。謙信については多言の要はないが、関東管領上杉氏の下で越後の国守護代を務めた長尾氏出身、当時の室町幕府の関東管領上杉憲政から囁きされ山内上杉氏の家督を譲られ上杉政虎、後に時の將軍・足利義輝の一字を貰い輝虎と称した（謙信は後の法号）。内乱続きの越後国を二歳の時に統一し産業・商業を振興し領国を劇的に繁栄させた。五次にわたる武田信玄との「川中島の戦い」は有名。卓越した軍事能力の持ち主で、信玄でさえ彼との直接対決は出来るだけ避けたといわれ「謙信は天下無双の名大将だ」と言わせたといつ。生涯に約七十回ほど戦ったが大きな戦いでは不敗、その戦いの殆どが侵略ではなく同盟の領主や部下の領地回復のためであったとされる。因みに、佐倉市王子台の公園には永禄九（一五六六）年に白井城を攻めた時の「謙信の一夜城跡」がある。

信玄に続いて謙信亡き後、時代は大きく変わる。「桶狭間の奇襲」で駿河の今川氏が没落、織田信長が抬頭したが天下平定を目前にして倒れ、その後、部下の豊臣秀吉が統一を成し遂げた。実子が出来なかつた謙信の養子・上杉家第二代景勝は秀吉により実質百五十万石といわれた越後国から会津・米沢地方百二十万石に転封となつた。後に豊臣政権で五大老となつた景勝は秀吉の死後に天下平定を目指した徳川家康に反抗したかどで「関ヶ原の役」の後、領地を大幅に削られ四分の一の三十万石（上杉家家老直江兼続の知行地・米沢）に減封されたのである（中国地方の毛利家に似ている）。しかし、謙信以来の名誉ある武門の誇りもあつたのだろう、景勝は約六千人という譜代の家臣の数は一切減らさなかつた。三代目定勝の時代にはまだ莫大な軍用御廻金が金塊として残されていたという。

しかし、跡目を継いだ歴代の藩主の乱費と藩の石高に過ぎた多数の家臣への俸禄、加えて度重なる幕府からの国役命令（例えれば、一回の国役に現在の金額にして百数十億円かかる場合もあつた）による大出費でこれらの蓄えはたちまち底を尽き、藩財政は枯渇して行く。藩は寛延三（一七五〇）年頃から家中の俸禄（既に景勝の時代にそれまでの八分の一となつていた）の四分の一借り上げを始めたので、中級・下級の藩士からは生活困窮者が続出する事態となり半農半士が増えた。民百姓には苛酷な年貢が課され、富商の打ちこわしや他国への逃散なども起り、困窮は益々深くなる。

さらに米沢藩のほんとうの苦難はこれからだつた。四代藩主の綱勝は妹・参姫が嫁している吉良上野介義央（元禄十五（一七〇三）年十二月十四日、大石内蔵助ら赤穂四十七士により討ち取られた）の邸に立ち寄つた後に突然発病し嗣子・養子がないまま死去した

のである。綱勝の正室の父に当る会津藩主保科正之の奔走で、嗣子に義央の子で二歳の綱憲を立てて徳川幕府のお家改易を辛うじて免れたものの領地を半減され、かつての百二十万石の大藩は遂に十五万石となる。



山形県と米沢市（置賜地方の中心部）
出典：ウィキペディア

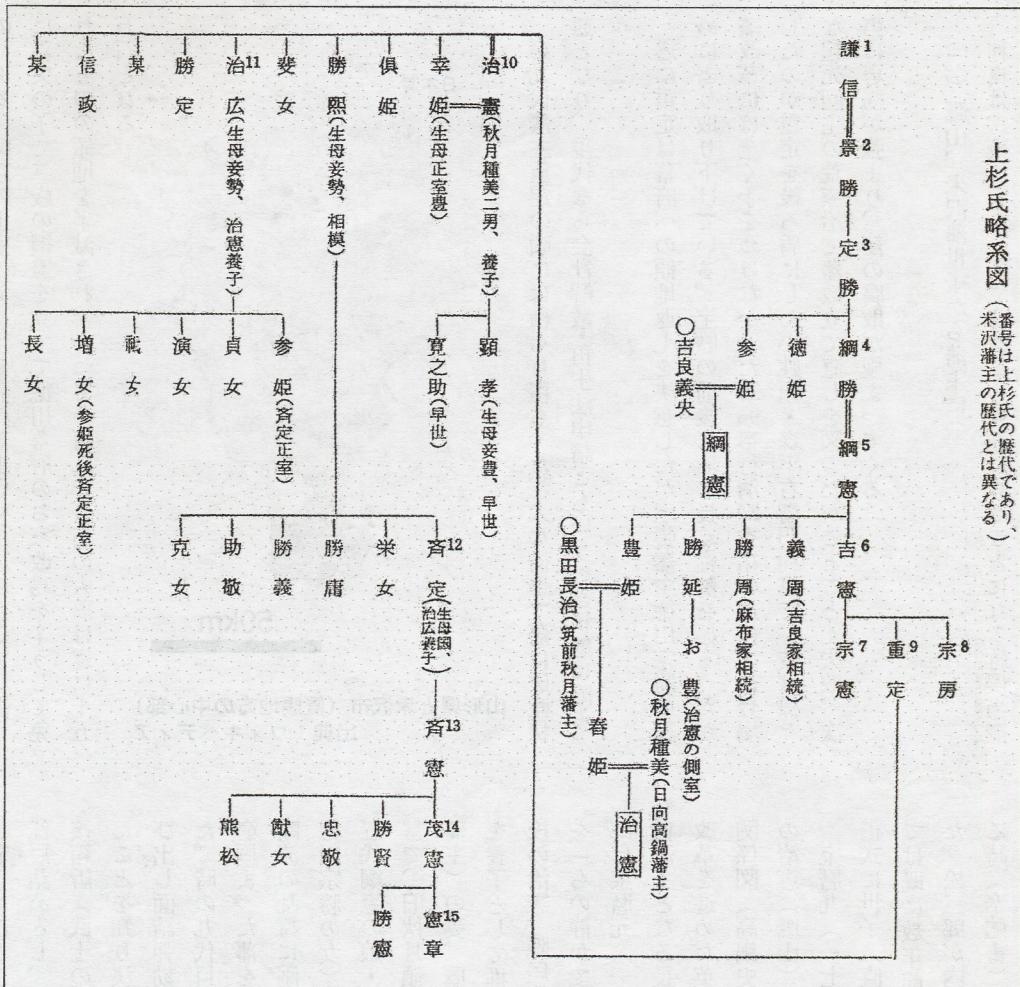
第九代藩主重定の頃には積もり積もった膨大な借金で藩は破産状態となり、現代なら会社解散・再生法申請ともいべき状態に陥る。遂に重定は幕府への領地返上を決意したが尾張藩主徳川宗勝の諫めにより取り下げる。宝暦の前後に藩で長く権勢を振るつたが藩改革には全く手をつけなかった筆頭奉行清野秀祐の退任後に登場したのが重定を後ろ盾にした小姓頭・森平右衛門利真で、彼は様々な起死回生の荒療治で藩政立て直しを図ったがことごとく失敗、次第に専横が強まり、藩の腐敗が極まつてくる。

(二) 鷹山、米沢藩世子から藩主に
利真は、後に鷹山の下で藩改革の先頭に立つことになる竹俣當綱たけのまたあきづなと若手の改革派・佐戸善政、のぞとよしまさ薬科松柏わやしならしょくばく（侍医、薔薇社主宰）らを江戸詰めとし、重定から遠ざけた。遂に米沢藩の領民から幕府に直接箱訴（武士の提出は許されない、一般領民が出るもの）が出されたことを知り決起した竹俣當綱らは秘かに国元に帰り、原奉行を呼び出し面詰弾劾の上誅殺した。宝暦十三（一七六三）年のことであつた。時の九代目藩主・重定は奢侈、女色を好み、己が一生を捧げ窮屈まつた藩を立て直す改革者には向かない性格で、能楽、特に金剛流の乱舞に溺れ、政治には背を向けていた。当時、正室（尾張藩徳川宗勝の女）との間に男子がなく、子は二女幸姫のみであった。五代綱憲の娘・豊姫（筑前秋月藩主黒田甲斐守長貞（黒田長政の遺言で、旧秋月領の一部五万石を二男の長興に与えた。長貞は二代目藩主）の妻、鷹山の叔母に当る）が六代目高鍋藩主秋月種美の二男を養子として推薦した。彼女はかねてからこの男子（幼名松三郎、後の治憲、隠居後鷹山、早くに実母をなくし、豊姫が養育していた）を「もの静かで、利発、孝心厚い性格」として囁きしていた。松三郎は宝暦元（一七五一）年に高鍋藩江戸藩邸に生まれた。後に七代目藩主となる長男の種茂（鶴山、没後の法名は静觀公）は数々の藩改革を進めた英君である。高鍋藩秋月家、上杉家、秋月藩黒田家の関係図（高鍋史友会会長・飛田博温氏資料）を見ると、血縁の中での治憲（鷹山）の位置がよくわかる。

宝暦九（一七五九）年、松三郎は重定の養子に内約となり、翌年、正式に世子（直丸と呼ばれた）となつた。一〇歳の時であった。藩では既に数年前に大飢饉に見舞われ窮状は益々深くなつてきていた。松三郎が内約を受けた時（上言書）と翌年、桜田の上杉邸に移る時（奉贋書）の二度、秋月藩家老の三好善太夫は誠心溢れる贋の

上杉氏略系図

(番号は上杉氏の歴代であり、
米沢藩主の歴代とは異なる。)



書を呈上している。掲載の『奉贍書』は宝暦十(一七六〇)年八月の世子決定の時の書である。

直丸はこの二書を生涯手許に置いて拳々服膺したという。三好善太夫は秋月譜代の家臣ではなく備後の三好郷（今の大分県三次市）の出、三代種信の時代（地名を財部から高鍋に変更している）に同郷から門田治部左衛門を家老として迎えた、その子孫である。彼は儒学者・山崎闇斎に私淑し、深い教養と高い識見の持ち主、高鍋藩で名家老の評価が高い人である。

直丸が世子になつて間もなく、前出の如く竹俣当綱らが奉行・森利真を倒す事件が起つたが、竹俣は許され執政（奉行）となる。幼少の世子直丸がすでにみなみならぬ人格と資性の持ち主であることを見抜いていた、改革派の精神的な指導者で間もなく病死することになる藁科松柏は江戸の街中で見込んだ折衷学者（儒学各派の優れた点を吸収し、理論より実践を重んじる新学派）細井平洲を直丸の師として推薦した。直丸、後の治憲（鷹山）は生涯この高潔な人・平洲を尊師として教えを乞い、彼の指導により藩校・米沢興譲館を再興してその精神的支柱としたのである。

『秋月家・上杉家・黒田家の関係』

○上杉家

幼名 桧三郎、直松

天明五年三二歳服居

享和二年五一歳廢山と改名

初代

輝虎（謙信）

2 景勝

3 定勝

4 綱勝

5 綱勝

6 吉宗

7 宗慧

8 重定房

9 重定房

10 治政

11 勝熙姫

12 齊定

13 齊慧

14 茂慧

15 慧章

16 騰慧

17 騰茂

18 騰徳

19 騰任

20 騰股

21 騰女

22 騰女

23 騰女

24 騰女

25 騰女

26 騰女

27 騰女

28 騰女

29 騰女

30 騰女

31 騰女

32 騰女

33 騰女

34 騰女

35 騰女

36 騰女

37 騰女

38 騰女

39 騰女

40 験慧

41 験慧

42 験慧

43 験慧

44 験慧

45 験慧

46 験慧

47 験慧

48 験慧

49 験慧

50 験慧

51 験慧

52 験慧

53 験慧

54 験慧

55 験慧

56 験慧

57 験慧

58 験慧

59 験慧

60 験慧

61 験慧

62 験慧

63 験慧

64 験慧

65 験慧

66 験慧

67 験慧

68 験慧

69 験慧

70 験慧

71 験慧

72 験慧

73 験慧

74 験慧

75 験慧

76 験慧

77 験慧

78 験慧

79 験慧

80 験慧

81 験慧

82 験慧

83 験慧

84 験慧

85 験慧

86 験慧

87 験慧

88 験慧

89 験慧

90 験慧

91 験慧

92 験慧

93 験慧

94 験慧

95 験慧

96 験慧

97 験慧

98 験慧

99 験慧

100 験慧

101 験慧

102 験慧

103 験慧

104 験慧

105 験慧

106 験慧

107 験慧

108 験慧

109 験慧

110 験慧

111 験慧

112 験慧

113 験慧

114 験慧

115 験慧

116 験慧

117 験慧

118 験慧

119 験慧

120 験慧

121 験慧

122 験慧

123 験慧

124 験慧

125 験慧

126 験慧

127 験慧

128 験慧

129 験慧

130 験慧

131 験慧

132 験慧

133 験慧

134 験慧

135 験慧

136 験慧

137 験慧

138 験慧

139 験慧

140 験慧

141 験慧

142 験慧

143 験慧

144 験慧

145 験慧

146 験慧

147 験慧

148 験慧

149 験慧

150 験慧

151 験慧

152 験慧

153 験慧

154 験慧

155 験慧

156 験慧

157 験慧

158 験慧

159 験慧

160 験慧

161 験慧

162 験慧

163 験慧

164 験慧

165 験慧

166 験慧

167 験慧

168 験慧

169 験慧

170 験慧

171 験慧

172 験慧

173 験慧

174 験慧

175 験慧

176 験慧

177 験慧

178 験慧

179 験慧

180 験慧

181 験慧

182 験慧

183 験慧

184 験慧

185 験慧

186 験慧

187 験慧

188 験慧

189 験慧

190 験慧

191 験慧

192 験慧

193 験慧

194 験慧

195 験慧

196 験慧

197 験慧

198 験慧

199 験慧

200 験慧

201 験慧

202 験慧

203 験慧

204 験慧

205 験慧

206 験慧

207 験慧

208 験慧

209 験慧

210 験慧

211 験慧

212 験慧

213 験慧

214 験慧

215 験慧

216 験慧

217 験慧

218 験慧

219 験慧

220 験慧

221 験慧

222 験慧

223 験慧

224 験慧

225 験慧

226 験慧

227 験慧

228 験慧

229 験慧

230 験慧

231 験慧

232 験慧

233 験慧

234 験慧

235 験慧

236 験慧

237 験慧

238 験慧

239 験慧

240 験慧

241 験慧

242 験慧

243 験慧

244 験慧

245 験慧

246 験慧

247 験慧

248 験慧

249 験慧

250 験慧

251 験慧

252 験慧

253 験慧

254 験慧

255 験慧

256 験慧

257 験慧

258 験慧

259 験慧

260 験慧

261 験慧

262 験慧

263 験慧

264 験慧

265 験慧

266 験慧

267 験慧

268 験慧

269 験慧

270 験慧

271 験慧

272 験慧

273 験慧

274 験慧

275 験慧

276 験慧

277 験慧

278 験慧

279 験慧

280 験慧

281 験慧

282 験慧

283 験慧

284 験慧

285 験慧

奉 贈 書

第一の御勤め、片時も御憲怠なされまじき事。

一、其の御家の御式法、小事なりとも御遺化なされまじく候。大臣はお國の柱、小臣と雖も眞見を申候者は、必ず御説び御受入れなさるべく候。諒めを入れる事は人君の美德にて、

諒を申候臣は職場の一番槍の功より増さると、やんごとだき御方の仰せられし事、かねがね御覺悟なさるべく候。

一、人に君たる御身は、寛仁大度と申候てゆつたりとして人を憐み、御胸中広く人を疑ふことなく、何事もあくみの御座なきように御心懸け遊ばざるべく候事、御身持第一の御執行は、

敬の一字に御座候。敬と申す事むつかしき事にてもなし。御心の向きを正直にして心の本を

東ね、末の散らぬようになされ、立居するまい番人の附いてゐる如く、事をするに目付のあるように影日向なく、油断致し申さざるが敬と申すものにて、是に残る事御座なく候。然れども始めあらざる事なし終りあること難しと申候て、統き申さず候まゝ一日より一月に至り、一月より一年より百年をなし候へば、何事も災の出来候事もなく、身の御養生の悪き事もなく候。もうもろの邪惡も除き申候ゆえ、敬は百邪に勝るとも古人の仰せられしためしも御座候。

一、人の上に居給ふ御身は何事も諒退深く、我に智慧ありとし給ふ事なれ。下より褒めそやし候へば、大方は我は智慧ある者と思召し候より万の惡事も出来諒をも招き給ふ事に候。春を禁じ僕約を守り、人に施した事は恵ひ給ふ事なれ。人に恩を受けた事は、聊か忘れ給ふ事なれ。善事は少しなりとも必ず為し給ふべし。惡事は少しなりとも必ず為し給ふべからず。我身つめりて人の痛きを知ると申候。我さひの事は人も同じくきらひの事と思ひやり、人に仕かけざるように致し、萬づにおもひやり致し候事、船の道と申候て御生涯執行、是に過ぎたる事なく候。愚かに拙き人も、人の上を譏り咎むる事は明かなり。賢く明かなる人も身の上の悪しきを知る事は暗し。人の上を責むる心を以て自身を責め、我身をゆるす心を以て人をゆるさば、大やう宣しからむと古人も宣へり。

今度わが国の公子上杉家へ入らせられ候に付、幼少よりも御存じに成り申すべきの種々重道が悉かなる書付、恐れながら御錢別に差上げ奉り候。夫れ人は貴賤となく天地を父母として生る

一、兼々父君の御教訓の如く、忠孝の御事

れば、大父母の御心にかなうように心を御用ひ成され候事、肝要の御儀と承り候。天地の大父母は何をか心とするなれば、天地は物を生ずるを以て心とすとあれば、物を育て害はず慈悲の心を以て心とし、仮りそめにもむごき事を好まず、君を敵ひ父母に孝し家人を憐むに至るまで、皆この意にあらざる事なし。されば人の君となりて「仁」を止ると申す事の候へば、人君の道に至る肝要の御事と奉存候。天地の心にかなひ給へば、天地の冥福もあり人道にもかなひ給ひ、幾千世までも目出度御榮えなされ候事、必定の理りにて御座候。

斯く書き綱なば浜の真砂の数より多かれど、おまなき御心には論しがたき事をも書綴りても益なく、且は筆の力もなければ暫くおくとぞ。

宝曆十年庚辛年八月吉日

三好善太夫重道敬書

三、苦難に満ちた鷹山の改革

「うけつぎて 国のつかさの身となれば

忘るまじきは 民の父母」

鷹山（以下、治憲または鷹山）が若干十七歳の若さで藩主になつた時に詠んだ歌である。米沢藩の抱える余りにも大きな負の遺産（當時の藩の年間予算の数倍もの借財があつたという）を受け継いだ、常人とは異なる自覚と決意が窺える。治憲は襲封後すぐに藩の祖神春日社と上杉家の鎮守社白子神社に二つの誓詞を奉納したが、これらはずつと後年に発見された。治憲は十七歳の時に自らも率先して守る大侯令を出す。即ち、藩主の賄い料を從来の五分の一に、五十人いた奥女中を九人に減らし、食事はかつて初代景勝公も実践したという一汁一菜やうこぎ飯とし、絹の着物は着用せず木綿のものを用いることにした。この僕約は一生続けたという。この「一汁一菜」や「うこぎ飯」は鷹山が養子先の上杉家の歴史をよく学び自身の改

革に活かしていたことを物語っている。十九歳の時に初めてお国入りをして領地の惨状を目の当たりにするが、父祖伝來のしきたりに凝り固まつた藩の重職達は小藩出身の藩主を侮り、彼の出した改革案にことごとく猛反発し、無視したので藩政は停滞した。十九歳で重定の長女・幸姫と婚礼の典を挙げる。しかし、幸姫は生まれながらの発達障害児、三十歳で亡くなるまで、幼児のままであつたといふ。治憲はこの幸姫をたいへん可愛がつたが後嗣は望めないので、二十歳になって四代藩主綱憲の子・勝延の娘・お豊の方を側室とした。十歳年上のお豊との仲は良く、間に二人の男子（頤孝、寛之助）が生れたが、残念ながら二人とも夭折している。

さて、鷹山が十七歳で米沢藩第九代藩主となって六年後、二三歳の時、七家騒動が起つた。かねてから奉行・千坂対馬ら七名の重臣は鷹山の改革政治を公然と妨げてきたが、鷹山の退陣を迫つて強訴に及ぶ。鷹山は長年に亘り目付役に彼らの所業を調べさせていたが、ここに到り遂にこの七名を処断（二名を切腹、五名は閉門）、さらに、黒幕の藁科立沢を斬首し、改革不退転の決意を内外に示した。実家の高鍋藩では遡る事約百年前の三代目秋月種信が目付役を新設し、四年の觀察の結果をもつて一連の「上方下方騒動」の処断に成功しており、鷹山の「七家騒動」の処断はこれに良く似ていて鷹山がこうした実家の歴史にも学んだのではないかと想像される。この封建時代において、鷹山は基本的に領民を上下の別なく遇し、その才能を伸ばすという斬新な思想を持っていた。天に時なく、その後旱魃、冷害が連続し、災害、災厄は幾度も領地を襲う。鷹山がその生涯に行つた改革については多数の詳細かつ克明な資料があるが、彼は臣等と共に考えられるあらゆる手段を講じてこの難局を凌いだ。何

度となく領地を巡回し、「籍田の礼」を行い、

（余談）「籍田の礼」古代中国・周で行われた儀礼。国の農業督励のため、天子自ら田を耕し収穫した米を祖先に供えたことから始まつた。鷹山は、凶作で困窮し働く意欲を失いかけていた藩の農民を励ます為にこの故事に倣つた。武士が田に入ることを恥とする風習は改まり、翌年から家臣団による新田開発が始まつた。収穫された米は祖靈に供え、余剰は下級武士への扶持米として与えた。この習慣は今も神事として残されている（米沢市役所・城下町歴史探訪）。

荒地の開墾や新田開発を奨励し、灌漑用水路の設置、農業技術の研究を行い、豊作の年に備え糧庫を充実させるなどした。また、米作依存のリスク軽減のため、漆、桑、紅花、楮、青苧（麻の原料）など夫々の百万本植栽を開始した（一七七五）。さらに、より付加価値を高めるべく原料加工も奨励した。例えば青苧からできる米沢織は今でも名産品だ。農業振興だけでは莫大な藩の借財は払えない。時間はかかったがこの産業振興の寄与で財政は徐々に上向いて行くのである。この時代に始まつた養殖の米沢鯉や深山和紙は今も米沢の名産品である。また、漢方医学の振興にも意を用いたという。「文学の事は治國の根源」と信じる鷹山は藩の困窮極まる中で教育振興を志した。師と仰ぐ細井平洲の第二次米沢下向に際し、元禄十（一六九七）年時の藩主・綱憲が建てた學問所を再興し、藩校・興譲館を創設した。「興譲」とは、譲の心を興す、譲とは他者を思いやる心、平洲の命名による。藩校・興譲館の子弟が藩の改革を担つて行

き、藩校は糺余曲折の歴史を経ながら隆盛の今に至る。この「興譲精神」が現在の興譲館高校、そして米沢の人達に脈々と流れている。

(余談二) 鷹山幼少の時、余命を悟ったか藁科松柏は細井平洲を見出し、竹俣当綱が鷹山の師として推薦する。平洲は(享保十三(一七二八) 享和元(一八〇一) 年) 尾張知多郡(現愛知県東海市) の農家生まれ、幼児から学問に励み、後に折衷学派として頭角を現した。江戸に私塾を開き、武士だけでなく町民、農民にも分かり易く学問を広めた。西条藩、紀伊藩等で教え、宝曆十三(一七六三) 年に三顧の礼を受けて鷹山の師となり、三度米沢に下向、三度目には封建時代の因習を破つて藩主鷹山自ら郊外の普門院まで出迎え、世に知られた。

藩校興譲館を命名した。後、安永九(一七八〇) 年、尾張藩に招聘され、藩校明倫館(現愛知県立明和高校) の督學(学長) になった。東海市には市立平洲記念館(作家童門冬一が名譽館長) がある。

鷹山襲封の時から藩改革の右腕として強固な意志と優れた企画で奮闘したのは竹俣當綱だった。しかし、長年の疲労か、その行状には奢りと乱れが見られるようになる。天明二(一七八二) 年、彼は遂に失脚する。翌々年は凶荒、冷害の年で農作物にたいへんな打撃が待っていた。全国を襲った天災・天明の大飢饉でこれは六年間続いた。かねてから重定の長子治広を世子にしていた治憲は天明五(一七八五) 年三十五歳で隠居する(この時鷹山と号す)。既に名君の評価が全国的となっていた鷹山は後に將軍家斉の前でその善政を賞

されている。当綱の後は笠戸善政が改革を立派に引継ぎ、一度引退するが鷹山の命で再度藩政を担うことになる。鷹山の藩主在任は十九年間であったが、生来丈夫で隠居してからも望まれて十一代藩主治広(鷹山が藩主となつた後に重定の子として生まれた)と十二代藩主斉定を助け、三十八年間に亘り藩政を後見した。文化期(一八〇四)、鷹山五四歳(頃から藩は安定と繁栄を迎えて行く。七十二歳で逝去。その九ヶ月後に藩の貢租(年貢)が完納され、お開い金が五千両となつたのである。

※ 本稿は高鍋高等学校在京同窓会前会長 中野英樹氏が編集長を務められる、佐倉市・白井文化懇話会の季刊誌「うする」に掲載された論文を、氏のご承諾を得て抜粋し一冊にまとめました。続編が期待されます。

上杉鷹山公

封建時代第一の名君を生んだ土壤は深く広かつた（下）

中野 英樹



上杉鷹山公銅像
(高鍋町・町立美術館前)



秋月種茂公銅像
(高鍋町・町立美術館前)

撮影：何れも皆川雅之氏
(高鍋町在住)

秀吉に降伏後一死を許されて南九州に転封となり、日向・高鍋藩（現在の高鍋町と周辺の郷、初めは財部と呼ばれた）と宮崎地方南部の串間郷他二、三の小村を飛び地として加えた三万石の小藩として明治維新まで生き延びて行くのである。

四、高鍋藩・秋月家について

秋月氏の起源には諸説がある。日本史との対応ができるくるのは、天慶二（九三九）年に藤原純友（平安時代中期の貴族、海賊でもあった）が起した反乱（天慶の乱）の鎮圧に功績を挙げた大藏春実（九州大宰府の大官となる）からで、その流れとされる。子孫は後に北九州・筑前国・秋月の庄の領主として約三百八十年にわたり繁栄した。秀吉の九州征伐の時に島津方に付いた第十六代秋月種実（たねざね）は当時、北九州筑前・筑後北部など現在の朝倉市甘木・秋月地区中に実質三十六万石を領していたが、天正一五（一五八七）年、

（余談）高鍋の近郊木城町には九州の戦国史に残る、所謂「九州の関ヶ原」の決戦場の跡がある。まず、天正六（一五七八）年の「耳川の合戦」があった。豊前の国（今の大分県）一帯に勢威を張ったキリシタン大名・大友宗麟は島津領の侵略を企て、三万五千の大軍を以て南下、耳川を渡つて財部城の近く、木城の高城城を囲んだ。島津方はわずか五百名で懸命に城を守り援軍を待つ。そこに島津義久、義弘の軍が到着し、激烈な戦いと巧妙な策略の末に大友軍に大勝した。この勝利の勢いに乗つて島津軍は北九州の秋月氏と同盟し、大友宗麟の本拠を占領し、

九州一円をほぼ制圧した。進退窮した宗麟が秀吉に救援を急訴し、秀吉はこれに応え、兵二十五万を動員して九州征伐に乗り出したのである。

天正十五（一五八七）年、まず、秀吉は秋月氏の本拠・岩石城を攻略し、次いで肥後口に向かう。羽柴秀長は毛利輝元、小早川隆景、黒田長政、藤堂高虎、宇喜田秀家、長曾我部元親ら錚々たる武将を従え日向口に出陣し、高城城を囲む。ここに高城は再び歴史の舞台となつたのである。秀長軍と島津軍との熾烈な戦いは義久の降伏で幕を閉じ遂に九州は秀吉のものとなる。秋月氏が秀吉の命により天正十五年に入封するまでの財部地域（後、高鍋と名称変更）はこのような戦乱の歴史を刻んでいる。

高鍋藩の初代藩主は秋月種長で、最後の藩主、十代種殷の弟、種樹は徳川時代に若年寄格、昌平黌に学んだ幕府期待の俊秀で、將軍家茂の侍読を務めた。明治維新後乞われて新政府参与となり、維新の成就に寄与した。明治天皇侍読、大学大監（今の文部大臣）、勅選議員などを歴任した。ご子孫の一人種高氏は東大医学部を卒業し、現在臨床医として活躍している。

高鍋藩・秋月家の歴代藩主はこの貧しく、しかも飛び地を含む領地の經營にたいへん苦労しながら、様々な改革を実施していく。七代藩主種茂（静観公、寛保三（一七四三）～文政二（一八一九）年。幼名は黒帽子。後に鶴山と号した）は治憲とは八歳違いの実兄である。種茂は歴代藩主（特に種美）が築いてきた藩の政治や経済基盤等を、家臣らの補佐も得てさらに改革発展させた藩中興の祖である。性闇達、学を好み、仁愛厚く、家臣の意見を容れ治世に献身した点は治憲と共通していたという。この兄と略同時期に鷹山も米沢藩の改革を進めているのである。以下に関係資料から高鍋藩と米沢藩の改革を対比してみよう。

①世子の教育

種美（六代藩主、種茂と治憲の実父）・名家老三好善太夫を置いた。治憲・自分の師として細井平洲を招いた。

②隣保組織と農作仕付組合

種美・自助・共助を目的に作った（一七四三頃）。

治憲・五什組合（相互扶助の五人組制度）を作った（一八〇一）。

③藩緊縮財政の制度化

種茂（七代藩主、種実の嫡男、治憲の兄）・儉約令（一七六一）・治憲・大儉令（一七六一）前稿に記述。

④農村の子供の保護策

種茂・多子農村家庭の救済を行った（一七六一）

治憲・嬰兒殺しの禁止（一七七一）。農村の間引きを防いだ。また、

第三子より毎日米三合か畑物三合を給した。

生児愛育令（一七九九）。ようやく資金が出来たので実行

（余談四）種実の頃に筑後南部を支配していたのは松浦党の一族・柳川城城主蒲池氏で、歌手の松田聖子（本名・蒲池法子）はその子孫、現在の蒲池家の当主は彼女の兄である。蒲池家はその後、隣接の竜造寺家に領地を奪われたが後年再興し、江戸時代は柳川藩家老格だった。

十五歳以下の子が五人の場合、末子が五歳になるまで五人扶持を給する。

④藩校の創設による教育の振興

種茂・人材育成に努めた父種茂の志を引継ぎ、民の声を集め上申制度（存寄制度）を活用。また、藩校・明倫堂を創設した（一七七八、朱子学を基本とした）。現在の宮崎県立高鍋高校はその流れである。

治憲・藩校・興譲館を再興（一七七六、事実上の創設と言われる）。

これは、師の細井平洲の薦めによる。現在の山形県立米沢興譲館高校がその流れであることは言うまでもない。

⑤民の声を集めた

種茂・存寄制度を活用した。

治憲・上申函を設置した。上訴には記名が必須であった。

⑥植産の奨励

種茂・漆、棕櫚、茶、櫟等の植栽による産業振興を図った。

治憲・桑、漆、青苧、楮等のそれぞれ壮大な百万本植栽計画を進めた。

このように両藩の改革には類似点が多く、兄の種茂と弟の治憲は実父種美の病氣見舞などで訪れた秋月家の江戸藩邸（麻布にあつた）でしばしば会い、互に励まし合って改革を進める関係にあつたのではないか、推測だがたいへん興味深いところだ。

（余談五）治憲はその血筋を遡ると千姫に到る。「みつかいどう

千姫研究会資料」（秋月敬子氏提供）によると、千姫と本多忠

刻との娘・勝姫は池田光政（岡山城主三十一万五千石）に嫁し、四人の息女と男子一人を生んだ。末の娘・左阿姫は中川佐渡守久恒（農後竹田城主・七万石）に嫁すが、その嫡子・久通の息女が高鍋藩第五代藩主・種弘の正室となり、嫡子の六代種美（正室春姫は筑前秋月藩主・黒田長治と上杉綱憲の子豊姫の娘）の二男・治憲（嫡子が七代・種茂）と続いて行く。因みに、光政の嫡子・綱政の息女松姫は後代の佐倉藩主に繋がって行く堀田下総守正仲の正室である。

五、愛の人、上杉鷹山

なせばなる なさねばならぬ何事も

ならぬは人のなさぬなりけり

お豊の方との間に生まれた嫡子・顕孝（たいへん聰明で将来の藩主として期待されていたが十九歳で天然痘に罹り死去）が十歳の時に、当時三十五歳の鷹山が近習に対し細かい心得を与えて、最後に書き加えた歌、時代を超えて残る名句である。

文政三（一八二〇）年、米沢城内で鷹山七十歳、お豊の方八十歳の祝いの宴が開かれた。唯一の側室・お豊の方は、歌を嗜む教養のある、賢い女性であったという。この時、彼女は鷹山に次のような歌を贈っている。

年ごとに榮ますらん國民も

脇わうけふの君のめぐみに

水い水い歲月の想像を絶する艱難辛苦の末に現出した藩の樂園を語つて余りある句ではないだろうか。

お豊の方は翌年十一月、八十一歳で亡くなる。そして鷹山はその四か月後に逝去、七十二歳であつた。老衰といわれる。

九州高鍋の小藩秋月家に生まれた鷹山は縁あつて格式高く武門の誉れ高い米沢藩上杉家の養子となり、米沢の地に深く根を下ろし藩崩壊の危機を救つた。彼が年若くして藩主になつた時には彼の理解者や支持者は殆どいなかつたであろう。しかし、彼は己に厳しく「愛」と「仁徳」を内に秘めた人だった。当時の厳格な封建制を具現化した領主という枠内であつたとしても、周りに仕える家臣、領地で懸命に働く領民を等しく気遣う「愛の人」だった。

「愛」という字には「心」が挟んである。その深い「心愛」がまるで乾いた大地を恵の水が潤していくように人々の心を溶かし、別々の方向を向いていたベクトルを一つに合させ、それが遂には奔流の如き改革の流れとなつていつたのである。その流れは今に至るも米沢の人々の心の中に脈々と流れ続けている。明治二十二（一八八九）年伊東忠太らにより設立された米沢有為会（平成二十九（一八〇一）年に公益社団法人となる）は、置賜地方の人材育成を目指すこととするとして今も着実な活動を続けている。

若いときは知る由もなかつた高鍋藩と名君上杉鷹山公との縁、この度垣間見て、今、高鍋を心から誇りに思うのである。

さて、資料も散逸していく定かではないが、筆者の家の先祖は、

筑前から秋月家に従つて高鍋地方に来たのではと勝手に想像している。

秋月城址のある日本地区には中野姓が多いと聞く（高鍋地区には見当たらぬ）。米沢藩とは異なり、この時には大半の家臣が帰農したであろう。実家の場所（高鍋町の隣町旧富田村上日置）は、筆者が父母（義雄と由紀子）や弟妹と共に戦後満州から引き揚げて来たときには、部落の中心の神社の前に約五千坪の山林付の家屋敷があり、他所に田畠や山林もあつた。近くに土塙の跡などもあり、この辺りは島津家の支藩・佐土原藩と一ツ瀬川を挟む、高鍋藩の前線基地ともいえる場所で、両藩の間に一朝事ある時の備えの場所だ。

筆者の四代前の中野勘太郎は苗字帶刀を許され組頭を務め、焼酎の醸造もやっていたようだ。嫡男栄助の長男（筆者の祖父）は造酒蔵と言つた。二男の文雄は大阪大学医学部を出て高鍋町の開業医安藤家の養子となつた。付言だが、父義雄は期待されて文雄の養子となるが医師になるのを嫌い、大阪外國語専門学校（中村白葉、陳舜臣、司馬遼太郎が出ている、現阪大外國語学部）ロシア語科に進み（実家に帰された）、満鉄の調査部に勤務した後、最後は七十九歳まで九州国際大学の副理事長（国際金融論）を勤めた。

閑話休題。種茂公が創設した藩校明倫堂は明治維新後廃校となつたがその流れを汲む城下町からは維新後、立派な人たちを輩出している。その幾人かを挙げる。

筆頭に挙げるべきは、明治初期、岡山に日本初の孤児院を創設し、「児童福祉の父」「岡山四聖人」と称えられた石井十次である。

石井十次と深い交流で結ばれた高鍋町初代町長の久保昌業（久保



石井十次像（高鍋中央公園）

撮影：皆川雅之氏

昌也氏の実父、そして、いわゆる大津事件（明治二十四年、ロシア皇帝が大津市内で巡査津田三蔵に襲われた）の時の検事総長、後に大審院長となつた三好退三、府立一中校長（現日比谷高校）勝浦鞆雄、石井十次の支援者・宮崎病院院長・荻原百平、読売新聞社長の秋月薩夫、住友を三井、三菱と並ぶ三大財閥に育てた住友紹治の鈴木馬左也、そして、最後の連合艦隊司令官で、剛直、高潔な人柄で知られ、周りの人々に慕われた小沢治三郎などである。

戦後では、建設省の生みの親の一人で、最近特に重要性を増している国土地理院を創設した上条勝久（参議院議員、建設研修所初代所長、後の建設大学校校長を歴任し、現役の百一歳で逝去。高鍋町名誉町民）や、高鍋女学校から自由学園に移り、スウェーデン刺繡等で現在も活躍する久家道子（旭日双光章受章）、また歌手の今井美樹がいる。産業人では、「百年の孤独」の焼酎一筋・黒木本店社長黒木敏之（筆者の遠縁に当る）など、また、作詞家、作家、小説家の阿久悠の両親は近在の川南町出身だ。

（余談） 石井十次（慶應元）一八六五年—大正三（一九一四）

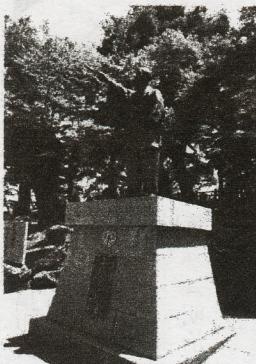
歴史小説はフィクションで眞実とは異なると言う。確かにその通りだとは思う。しかし、過去に生きた人物について残された資料や史実を丹念に辿り、その人の信念や生きざまから見た人物像をその作家なりに活き活きと甦らせ時空を超えて読者の想像力を搔き立ててくれるところには格別の面白さと夢があり、史料文学とはまた別の意義がある。

年）は高鍋に生まれ、今の岡山大学医学部に入学する。当初志した医師を断念して「岡山孤児院」を設立し、当時全国に溢れていた明治維新等の戦災孤児、濃尾大地震等の災害孤児の救済事業を開始し、その数は明治末には三〇〇〇名となつた。大原財閥の総帥・大原孫三郎は、現在の金にして数百億円の支援を行つてゐる。因みに、彼が作った大原美術館が蔵する世界の名画の数々は親交のあった画家・小島虎次郎が大原の依頼を受け海外で収集したものだ。虎次郎の妻は十次の娘・友で、大原、十次の児島の三人は固い絆で結ばれていたという。十次は後に、故郷高鍋の近く、広大な茶臼原に事業の本拠を移した。院長室には、彼が畏敬してやまなかつた西郷隆盛の「敬天愛人」の掲額があつた。彼の死後一端中断したこの救済事業は、戦後再開され、戦災孤児の救済に大きく貢献している。茶臼原では今も「社会福祉法人・石井記念友愛社」（理事長は、十次の曾孫である児嶋草次郎）として益々発展している。この団体の後援会員は全国に亘り、実に五万名に達している。十次を深く尊敬している宮城まり子は肢体不自由児の社会福祉施設「ねむの木学園」創設者で園長だ。

藤沢周平の『漆の実のみのる国・上、下』（最後の数十枚は作者逝去のため未完と）、童門冬一『全一冊小説上杉鷹山』は、彼らが鷹山の生きざまに深く感動して書いた渾身の力作、それぞれの「鷹山像」が描かれ感動を誘う。

そして、これら的小説や資料を通して、上杉鷹山公が「千古不変の日本男子の神髄」とは何かをしみじみと我々に語りかけてくれると思うのである。

六、鷹山公の藩校を訪ねて
職務に超ご多忙の校長先生を訪ねる約束があった。折悪しく溜まった疲れのせいか風邪気味だったが、この機会を逸しては何時にもかわからぬので、何が何でもという気持ちで（妻に介添えして貰いながら）平成二十七（二〇一五）年六月二十四日に米沢に出向いた。しかし、その甲斐があつた旅であった。



上杉鷹山公立像



上杉神社

いてその足で上杉神社や松岬神社に参拝した。上杉神社（別格官幣社）は旧米沢城奥御殿跡にあり、上杉家始祖・上杉謙信を祀ってある。この旧社殿は、大正八（一九一九）年の大火で焼失し、現在のものは伊東忠太が設計した。規模は小さいが素晴らしい建築物だ。すぐ近くには松岬神社がある。ここは上杉袖社の摂社で、上杉鷹山、上杉景勝、直江兼続、細井平洲、竹俣当綱、佐戸善政の六人が合祀されている。参道の近くには上杉謙信や鷹山の像が見られる。この近辺には他に鷹山公ゆかりの名所・旧跡が多くある。



興譲館出身の先達（校長室にて）
(左から) 伊藤忠太（建築家・文化勲章受賞者）
高橋里美（哲学者・文化功労章受賞者）
我妻栄（民法学者・文化勲章受賞者）
浜田廣介（児童文学者）

上野駅から米沢駅へは新幹線で約二時間十五分、着

は休館日だったので明日訪れるることにして予約の宿がある赤湯温泉に向かった。

この温泉は鷹山公が客人をもてなす時によく訪れたといふ。鄙びてはいるが泉質の良い温泉である。当会の

さんが薦めてくれ

た旅館で接待して

くれた人々は朴訥

ながら温かく、こ

の地域の気風が嬉

しく感じられた。

翌日はまた米沢

に行き、先ず「伝

国の杜」を見学し

た。上杉博物館に

は、将軍足利義輝

の依頼で狩野永徳

が描き、後に織田

信長が上杉謙信に

贈った国宝・上杉

本洛中洛外図が所

蔵されている。

因みに、佐倉市の国立歴史民俗博物館には洛中洛外図甲本（作者は狩野元信らと推定）、乙本（作者は永徳の弟・宗秀の説あり）が所蔵されている。何れも重要文化財だ。

訪問当日は、戦国時代の代表的なかぶき者・前田慶次の関係資料が展示されていた。置賜文化ホールには立派な能舞台があった。

時間が迫っていたので「伝国の杜」を一通り見て廻り昼食を取つた後、米沢興譲館高校に向かった。タクシーで約十分の距離にあるこの高校は米沢市の郊外、広大な畠と森の中にあり、素晴らしい自

然環境に囲まれている。

校長の岸順一先生と同窓会担当の方が迎えて下さった。

校長室には、「興譲館」（第十代藩主・斎憲書）の掲額、この名門

校から出た四人の著名人、児童文学者・浜田廣介、法学者・我妻栄、

哲学者・高橋里美、建築家・伊藤忠太の写真が掛っていた。岸先生

も興譲館の卒業生で、我妻先生の最後の講義を聴講されたそうだ。

先生に校内を案内して頂いた。この高校は国公立高校としては我

が国最古の高校で今年で創立二百三十九年を迎える。文科省のス

ペー サイエンスハイスクール指定校もある。

鷹山公生誕一百五十年を記念してわが母校・高鍋との相互訪問が

平成十二（二〇〇〇）年に始まっている。二十八年前に市の中心部

から移転したこと、二階には高鍋高校の紹介コーナーが設けら

れてあり嬉しかった。高鍋高校内には興譲館高校の記念コーナーがある。

立派な校舎の向かって左側には壯麗な藩学創設三百年記念講堂が

建っていて、これは卒業生の寄付によるものとのこと、この中には史料室がある。室内は非公開で、鷹山公を始め歴代藩主の時代の絵

や直筆記録等の史料がギッシリ収められていた。鷹山公や、師の細

井平洲の掛け軸には感動した。

新幹線の時間の関係もあり、もっとゆっくり見たいという思いを残して興譲館高校を後にした。米沢駅の近くにある我妻栄記念館は東北大震災の影響で傷んだので改修中とのことで残念ながら立ち寄ることは出来なかつた。

さて、興譲館高校東京支部総会は例年通りホテルニューオータニ



岸 順一校長と
米沢興譲館高校校長室にて

で七月十一日に開催された。筆者は甲斐副会長とともに出席した。

神野支部長、宮坂幹事長、そして岸校長も米沢から駆けつけて来られ、まるで十年來招かれている会のような気がした。祝辞では「鷹山公のご縁で高鍋高校在京同窓会は興譲館の皆様とこれからも常に一緒に続くご親交を願っています」という主旨の言葉を述べた。

なお、この小文を草するに当たっては、筆者の高鍋高校の同期生で、宮崎県地方史研究連絡協議会会長兼高鍋史友会会長・飛田博温氏と、ご父君が初代の高鍋町長だった後輩の建築家・久保昌也氏に懇切なるご教示を頂いた。記して深く感謝する次第である。

(平成二十七(二〇一五)年七月記)

(後記) 年が変わり、平成二十八年七月十六日にホテル・ニューオータニで開催された東京支部総会(今期から宮坂孝夫氏が支部長となっている)で再度お会いした岸校長先生によると改装は終わって一般公開されている。

参考にした文献と資料

- ・内村鑑三(鈴木範久訳)『代表的日本人』二〇一四(平成二十九)年(第三十九刷)岩波文庫(初版一九〇八(明治四)年)
- ・横山昭男『上杉鷹山』(日本歴史学会編集)二〇一四(平成二十九)年(第十一刷)吉川弘文館
- ・童門冬一『全一冊小説上杉鷹山』二〇一四(平成二十九)年(第四十刷)集英社文庫
- ・藤沢周平『漆の実のみのる国』下、二〇一一(平成二十三)年(第十五刷)文春文庫
- ・童門冬一『上杉鷹山の師・細井平洲』二〇一一(平成二十三)年(集英社文庫)
- ・安部三十郎『石井上次資料館研究紀要第12号』―歴史に学んで立ち上がるろう!―秋月種茂、上杉鷹山から学ぶ地域の振興二〇一一(平成二十三)年 p.233
- ・『公益社団法人・米沢有為会会報』二〇一三(平成二十五)年・佐藤良一『興譲の館』鷹山の人づくりをたどる毎日新聞連載記事、二〇一四(平成二十六)年度四月八日十九日
- ・『米沢興譲館同窓会会報』四十二号、二〇一三(平成二十五)年・『史友會報』第二十六号、一九八六(平成二)年、第四十四号、二〇〇九(平成二十二)年、高鍋史友會
- ・高鍋史友會會長・飛田博温氏提供資料(高鍋史友會東京講演)・史友會會員・秋月敬子氏提供資料(同上)
- ・昭和史の名将たちー伊藤整一と小沢治三郎・半藤一利、保阪正康『文芸春秋オール読物』第六二巻第七号、平成十九(二〇〇七)年七月
- ・田浦チサ子『ここるのふるさと高鍋・木城・串間紀行―宮崎県(補)筑前秋月、添田町』二〇〇八(平成二十)年、(株)瞬報社写真印刷
- ・児嶋草次郎「特別講演・石井十次の挑戦」
- ・二〇一六(平成二十八)年二月二十日・於品川三州俱楽部・ウイキペディアからも多くの補足資料を得た